小說

智惠子抄

佐藤春夫作

小說 智恵子抄

佐藤春夫

小説智恵子抄

定価 二五〇円
地方定価 二六〇円

昭和三十二年十一月一日発行©

著者 佐藤春夫
発行者 増田義彦
印刷所 星野経男
発行所 株式会社 実業之日本社
東京都中央区銀座西一ノ三
電話 京橋(56)五一二一～五
振替 東京三二六番

はしがき

「小説智恵子抄」はもと「愛の頌歌」といふ高村光太郎の詩集「智恵子抄」のなかの一句を本題とし「小説智恵子抄」をその副題として、雑誌「新女苑」のために昨年九月号以降本年八月号まで一箇年間連載して成つたものである。

単行出版に当つてかつての副題を本題と取かへたのは、書肆の希望に応じたものである。この題名は詩集「智恵子抄」の大に世に行はれるのに便乗しようとするかのもの欲しげなものに見えるのは面白くないが、事実としてこの作は詩集「智恵子抄」を小説化しただけの制作なのだから、小説「智恵子抄」と名告るのがかへつて正直なやうな気もするので作者は一考ののち、書肆の申し出を承認した。

この作の連載中、詩集「智恵子抄」は或は舞台に上演され或は映画化されるなどの事もあつて、高村氏の詩集「智恵子抄」の名は世に轟き甚だ大衆化されたやうであるが、拙作は夙に企画されて自ら別箇の志もあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

り、敢て時の流行に従つて人真似をしたわけではない。

この作に於けるわたくしは云はば詩集「智恵子抄」といふ台本によつて、これを小説的に演出し、また或る時は光太郎となり、或る時は智恵子となり一人二役の演技で俳優兼舞台監督のやうな仕事をしてゐるのである、解釈が浅く演技が拙くて、原作の高い精神と情趣とをどれだけ伝へ得たかはおぼつかない。詩集「智恵子抄」に心酔する人々の満足するところとなるか、どうかを危ぶむものである。それでも小説の体だけは得てゐるつもりである。

詩集「智恵子抄」は見かけの単純にもかかはらず、その詩人の人がらをそつくりの複雑で隠約の多いものだから、その高い精神と深い深い詩趣とは、わが拙い散文では容易に伝へ得ない。識者の不満は是非もなからう。しかし年少の読者が詩集「智恵子抄」を解読のためには多少の役立つところのあるのも疑はないし、まだ原詩集がわが解釈の不備で傷つ

くはずのないのを信じ、安んじてこれを上梓する。

詩集「智恵子抄」は大たいとして事実、実感を重んじて書かれた半記録らしいのに較べて、わたくしのは徹頭徹尾、小説で虚実取交へたもので、作中人物も実名あり仮空の人名あり、作中の土地も踏査の暇もなくすべて居ながらにして名所を知つた仮空風景である。その心して読まれたい。

もと若い女性のための雑誌に執筆したとは云へ、器用な仕事をする才覚のないわたくしは、いつものとほりわが性に従つて制作し、別に若い女性を目標に、これを書いたといふわけでもなかつた。ひとり年少の子女とのみは限らず、すべてのわが読者がこれによつて真の愛情の様相を知る端緒をここに見出してくれるならば作者の本懐は達せられたのである。

なほこの書の巻頭に作者の若き日の肖像画をかかげたのはいささか面

映い次第であつたが、高村光太郎氏の手に成るものであり、またこの制作のモデルになつてゐる間、画家は先年遊んだ高上地の話やら、愛人智恵子の噂もよく出て、そのうち結婚すると語つてゐたのが、恰もその年末に実現したなどこの書の内容と　因縁の浅くないのを思つて、これで巻頭を飾る気になつたのである。

一九五七年暑き日

東都目白坂にて

佐藤　春夫　誌す

目次

口絵　若き日の佐藤春夫像……高村光太郎画
第一部　静寂の価……9
第二部　同棲同類……101
第三部　魂の別離……193
ばらと双燕（表紙）……中国剪紙

著

者

自

装

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一部　静寂の価

（1）

洋画家椿英介は、先年目白の女子大学家政科出身の和子を妻として既に三年以上になるが、新婚の夢はさめず、今だに幸福に酔ふやうな生活をつづけてゐた。

和子は学校時代の趣味から出発した演劇から女優を志し、舞台生活を許してもらへさうな相手として良人を選んだもので、舞台に立つては近代芸術の精神を理解した新人と重んじられる一方、家庭の良き主婦として椿夫妻の芸術的家庭生活は当人たちを満足させるばかりではなく、他も羨むばかりで、友人のなかには椿の奴は細君ができて以来友人を疎略にするなど、ありもせぬ難癖をつけて嫉き気味なのもいる程であつた。

和子はこの頃その所属劇団の近く上演するはずのハウプトマンの「寂

しき人々」で、妻のある学者から愛される女学生の大役を振られて、舞台稽古に張り切つていた。

新秋の或る夜英介は、舞台稽古から帰つて、台所をかたづけ終つた妻を茶の間に待ちかまへてゐたが、その日は夜の稽古は休みといふのを幸に云ひ出した。

「どうだ。和子、君の友人でいいお嫁さんになりさうな素質のヤング・レディはいないものかね、勿論美しくなくてはならない。芸術家の妻になる候補者だが。僕は今日留守居の一日中そればかり考へつづけてゐたものだ。」

「どなたかにそんな人をお頼まれなすつたの。」

「いや、誰からも頼まれない。僕が自分から思ひついたのだ、友人のために。」

「どなたなの、結婚の相手をあなたから探してもらはなければならない

といふたのもしい芸術家は？　わたくしの知つてゐる方、知らない方？　知らない方ならお目にかかつてから似合ひさうな方を考えた方がいいわ。」

「わざわざ紹介するまでもなく、君も先刻ご存じの高村君のための候補者だ。」

「高村さんなら、降るほどありませう。あなたなんかおせつかいをしないでも、うちの劇壇のひとでも大騒ぎよ高村さんの詩と云へば。」

「でも、そんなのは駄目だよ。」

「女優なんかでは？」

「さういふ意味ではない。気に入りさえすれば芸人だらうが女優だらうが、そんなことにかまふ人ではないが、洋行帰りの名家のおん曹子のところへその詩が気に入っておほ騒ぎするやうなのは、きつと駄目だと云ふのさ。」

「へえ？　むつかしいのね。」

「うん、あの人は見かけはあのとほりだが、あれでなかなか気むづかしいところがあるよ、きつと。」

英介はさう云つただけで、それ以上は、すぐ説明しようともしなかつた。簡単には説明できさうもないと思つたからであらう。実のところ彼自身にもまだよくはわかつていなかつたのである。彼は不意に座を起つて廊下づたひに画室に行つたと思つたら、直ぐに雑誌「スバル」を一冊握つて帰り、どかつと再び座にもどると、雑誌のページを繰つていたが、やがて泥七宝、　高村光太郎とあつたところをひろげて和子の方へ突き出し、

「読んでごらん。高村のこのごろの生活まる出しなのだから。そこが詩としていいのかも知らないが、僕には詩なんぞ、どうでもいい。美術家のくせに絵も彫刻も放げ出して詩ばかり作つてゐる。それだけでもいいかげん気がもめるのに、ロクでもない詩人なんて奴ばかりにつき合つて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.